

秋田大学

日本語・日本文化研修論文

日本の方言政策への考察

—標準語時代の中での方言の価値について—

秋田大学教育文化学部

日本語・日本文化研修留学生

名前 キム ドヒョン

目次

はじめに	3
1 近代日本の方言政策	3
1-1 標準語としての方言施策	3
1-2 方言の弾圧	6
1-3 方言の復興	7
2 現代日本の方言政策	8
2-1 滅び行く方言	8
2-2 地域方言施策	8
2-3 地域方言活用—秋田	9
3 現代日本の方言の価値について	13
おわりに	14
参考文献	16

日本の方言政策への考察

標準語時代の中で方言の価値に対して

はじめに

外国人として日本語を学習するとき、標準語を中心に学習してきた。特に方言については一度も考えたこともなかった。もちろん、母国である韓国も方言があつて今でも使われている。方言に対して深く考えずに、初めて留学を決めたところは京都だった。ただ、日本の千年の首都であつた京都で留学をしたいという思いで留学を始めたが、最初は驚いた。今まで学習してきた日本語が全然聞こえないし、なじみがない方言が使われていて、初めての日本留学が厳しくなると感じられた。しかし、京都の生活に適応しながら京都のすべてが知りたかつた。特に京都の方言がとても面白くて積極的に方言でしゃべるようにしたら、京都の人々が喜んでくれた。それで、いまだにも関西の方言を聞いたらすごくなじみを感じる。

1年間の留学を終えて一度帰国したが、もう一度日本で留学したいと決め、留学を決めたところは秋田である。韓国では秋田は縁があるところだった。2007年ドラマ「アイリス」のロケだったことをはじめ、現在は秋田から直接行けるようになった。秋田で留学をしながら、新しい環境に接しながら、秋田の方言も接することができた。秋田で住んでいながら、市内では秋田弁でしゃべる人は少なかったが、たまに会う人々は秋田弁を使っている人々であつた。やはり意味を聞き取ることはとても難しかったが、話すときに秋田弁を使ったら、相手はすごく喜んでくれた。京都と同じく秋田の人も方言に対して愛情を持っていると感じられた。

このような方言に対して日本人の意見を聞きながら、みんなの意見の中で面白か

った点は、ほかの県民と話すとき、時々意味が分からないことが興味深いところだった。もちろん、まったく違うことではないが、ある程度は通じると予想したが、それ以上通じない場合もあるという話もあった。今まで考えた方言のイメージと全然違うことだった。それで、方言に対して研究をはじめたが、ある問題に気付いた。現在方言の中で消えてしまう危険にさらされている方言があった。このような方言の危機に、その方言を守るために地方ではどのような施策があるか聞いてみたかった。特に、現在留学先である秋田の方言施策について調べたかった。本研究の目的は方言に対する政策や地域の施策に関して考察し、標準語が使われている現在のなかで、方言の価値、多様性に対して論じたい。

1. 近代日本の方言政策

1-1 標準語としての国語施策

日本は縄文時代以来から言語の多様性が存在していた。また、日本語の方言にも文法や語彙に言語的に多様性が見られる。しかし、近代に至ってから日本は国民の形成、国民統合と国民国家建設の要件として標準化政策をしなければならなかった。このような政策は日本だけではなく、世界の国々に受け入れられていった。フランスやイタリアのような国々が近代化の一環として言語の標準化に焦点を当てていた。

日本も例外ではなく、近代化のために「国語」としての日本語を整備した。ソジエ内田（2008）によると、さまざまな方言を統一する動きが始まったときは、19世紀後半からである。統一以前の日本語は、地域方言や階級方言による差異が大きく、異なる社会グループの者たちが会話を交わすのが困難なほどであった。このように日本は統一した言語の必要性について考えなければならなかったと思われる。また、ソジエ内田（2008）によると、漢文・和文を問わず、書きことばは話しことばと大きく異なっていたため不都合も多かった。書きことばでは、平安時代の発音をもと

とした語源主義、文法主義の歴史的仮名遣が用いられたため、かならずしも綴りは発音を表していなかった。日本はこのような問題を解決するため標準語の必要さに焦点を当てた。このような言語状況について日本政府は大きな決断をしなければならなかった。全日本で通じる標準語を整備することに注目した。

明治時代以後、日本では中央集権国家を目指していた。ソジエ内田（2008）によると、1853年、黒船到来の衝撃を受けて、当時の指導者たちは、西洋列強と平等の関係を構築するために、西洋的な近代国家の創立を目指した。「一国家、一民族、一言語」の原則に倣い、立派な国家語を作らなければならないとの重圧感のもとに、言語の統一を断行したのである。この時期に行われた政策の大枠は、漢字廃止・節減、言文一致、表記法の整備、標準語制定であった。このような政策を見ると、日本は近代化をするため、あらゆる分野で標準語が進められたことがわかる。

たとえば、学校教育や軍隊の中でも標準語を押し進めた。ソジエ内田（2008）によると、1888年に設立された国語伝習所の趣旨には次のように論じられている。

「国語は、国体を鞏固にするものなり、何となれば、国語は、邦語と共に存亡し、邦語と共に盛衰するものなればなり」特に軍では、異なる地方の者同士では、方言の差異のために命令の取り違えすら発生しかねない有様であり、死活問題でもあった。このことから、方言および日本で話されていた他の言語を廃する政策がとられた。方言を話す者が劣等感を持たされたり、または差別されるようになり、それまで当たり前であった方言の使用がはばかれる事になった。

方言の弾圧が始まった以来、戦後の地域言語社会のトピックは、日本列島のことばの標準化であった。真田（1999）によると、電波メディアの普及によって、東京語を基盤とした言語変種が圧倒的な勢いで全国に進展した。そして、その言語変種が共通語として機能する中で、その要素が各地で方言コードにまで浸透したのである。それは、裏を返せば、伝統的な方言要素の衰退という事態であった。このような事実から見ると、政府はメディアを用いて標準語政策を広げたことがわかる。メディアは人に大きいな影響力を与えるもので、標準語が放送や新聞、教育などに進められると、次の世代は標準語を使うことになる。結局、方言の衰退は決まってい

ることであった。

1-2 方言の弾圧

上記に示したように、標準語は日本全国に広がっていた。特にラジオやテレビ、新聞、雑誌など、メディアの普及によって標準語を使う人が増えた。その例として、真田(1999)によると、テレビで用いられる言葉は、上方芸能や地域を舞台にしたドラマ以外、その大部分は東京語である。例のように影響力があるメディアから標準語施策を広げていることがわかる。標準語施策を通して、日本は近代国家を目指した。ソジエ内田(2008)によると、日本が近代国家をめざした明治期において、エリートたちは西洋の国民国家イデオロギーに基づいて、少数派にたいする文化的・民族的同化政策を採用した。このような状況からみると、日本は近代化のために少数派に対して文化的・民族的同化政策を採用したことがわかる。それで、地域の人々が使っている方言もその同化政策の一部だった。

当時の標準語の基準は東京でエリートたちが使っていた東京弁が基準として規定された。ソジエ内田(2008)によると、政府が「正しい」日本語の規則を定めるということは、人々がそれ以外を「間違った」ことばの乱れとして排除するようになることを意味する。規範的なことばが定められると、東京に住んでいる教育ある人々は言語支配階級としての特権を獲得し、標準語以外の変種(方言)とそれを話す人々は後進性、無教養、閉鎖性と結び付けられ、撲滅や露骨な差別の対象となっていた。このような施策からみると、方言を使っている人々は、ただ方言を使うことだけで差別を受けていた。もちろん、日本が近代国家になるためには仕方ない、いちいち少数派のことを気にすると近代化に遅れてしまうという考えだったかもしれない。しかし、方言はその地域に対して大切なことであり、地域の人々の思いや生き方が込められているものである。近代の日本はその方言の大切さを看過し、標準語の政策を押し付けた。

1-3 方言の復興

上記に述べたように、近代の方言に対する施策は「弾圧」そのものであった。方言は矯正対象として扱っていた。しかし、戦後時代になってから方言の再評価の動きが始まった。ここで面白いと思われることは、「標準語」と呼ばれてきた表現が批判を受け始めたことである。この流れに影響を与えたことは、民主主義の流れであった。民主主義の理念は「平等」である。その平等の動きが広がりながら、今まで偉い人、つまり東京のエリートたちが決めたことを批判した。それで1951年には号的な場では「共通語」と言い換えられるようになった。

また、真田真治(1999)によると、共通語として機能する言語変種が方言に干渉しつつある中で、地域の若い世代においては、伝統への指向を背景として、方言へ回帰しようとする傾向も一部で顕著になってきたという。共通語が使われていても、その地域の人とコミュニケーションや生活に方言が使われていたので、一部では方言へ回帰しようとしたことも見られる。

共通語が日本全国に広がるなかで、方言への認識も少しずつ変わった。特に学校教育も改善されていった。ソジエ内田 恵美(2008)によると、2009年度より使用される学習指導要領では、小学5・6年の目標として、「共通語と方言の違いを理解し、また、必要に応じて共通語で話すこと」、中学2年において、「話し言葉と書き言葉の違い、共通語と方言の果たす役割、敬語の働きについて理解すること」と、政治的に中立な立場を取っているという。このような共通語と方言が両立しながら、ある程度は方言が復興していると思われる。

2. 現代日本の方言政策

2-1 滅び行く方言

この章では日本の滅び行く方言について考えたい。全世界で使われている言語は7千の言語が使われている。しかし、その言語の半分以上は後100以内に消える危機に直面している。日本もこの問題について例外とは言えない。現在日本は標準語を中心に言語政策を広げているが、日本はたくさんの方言が存在しており、今でも使われている方言も種類がたくさんある。大阪のような大都市から小さな島まで、その方言の数は多いだが、その方言の中で継続できなくなる危険にさらされている方言もある。

現在、日本では八つの方言が言語消滅危機である。佐々木（2011）によると、2009年2月20日付の朝日新聞朝刊に「世界2500言語消滅危機、ユネスコ「日本は8語対象」」と記事が掲載されたと述べている。この記事では、2月19日に日本国内のアイヌ語を含む八つの言語をユネスコが危機言語と認定したことが報じられている。この八つの言語とは、アイヌ語、奄美語、沖縄語、国頭語、八丈語、宮古語、八重山語、与那国語である。このような現象は急に起きた問題ではない。標準語の普及によって、その地域の方言を使う人が減っている状況である。また、世代間の言語継承や話者数も減っている状況である。

このような状況をあわせてみると、標準語が普及され、小さな地域まで標準語を使うようになって、小数話者の方言は滅び行く危険にさらされていることがわかる。この問題に直面している日本は、未だにも日本は「1文化、1言語、1民族」だと考えが根強く残っていて、方言に関しては「正しくない」と考える場合が多く見られる。

2-2 地域方言施策

上記で述べたように、方言に対する印象は良いとはいえない。方言に対するろくな保護政策も考えられてなかった。そのせいで話者数が少ないほうの方言はこのま

ま消えてしまうという問題を抱えていた。また、方言を使うことだけで差別を受ける場合もあった。特に、東北方言は「田舎」の人が使う方言というイメージもあった。それで、ただ東北の方言を使うことだけで、職場とか公的なところで差別を経験したということもあった。

しかし、このような認識がどんどん変わっていった。1960年代から方言の学問化が進み、方言の価値に注目した。標準語の普及が拡散しているうちに、まだ地域では生活の中でよく使われていることは方言だった。それで、生活語としての方言の価値に対して学問化が進み、方言の体系に関する研究も進んだ。特に、各地域の方言の体系に関する研究が盛んになった。たとえば秋田の場合、佐藤 稔（2000）は秋田方言の体系について論じている。また、社会的に方言の価値を認識されて受けとめるようになってきた。

それで、方言は地方のほうからも積極的に用いられるようになった。特に地方では観光客を集めるために用いた。空港、バスターミナル、駅などの交通施設や観光案内所、方言で書いている挨拶言葉のポスターなどが多く見られている。

2-3 地域の方言活用—秋田

この章では地域の方言施策について考察したい。紹介する地域は秋田である。地域の中で秋田を取り上げた理由は、筆者が留学しているところが秋田で、その地域に関して興味があるからである。それで、秋田の施策について紹介しながら、地域の方言活用方法に関して考察したい。

秋田の方言はどんなイメージだろうか。日高（2011）によると、日本社会において、秋田の方言は「素朴さ」「温かさ」「懐かしさ」をかもし出す「イメージ方言」として機能するようになってきていると述べられている。個人的な考えは、秋田方言は田舎の情があふれる言葉だと考えていた。上記のように、日本社会ではふるさとのイメージがあるらしい。

秋田方言は秋田ではそのイメージを外に向けて積極的に活用していた。空港や駅で掲載されているポスターでもよく見られる。また、市民市場でもお客さんや観光

客のために秋田方言を用いている。



図1 __秋田市民市場ポスター



図2 __秋田市民市場の秋田弁紹介ポスター

図1・2のように秋田市民市場では秋田弁を活用して、市場に来るお客さんや観光客にアピールしていることがわかる。秋田方言を用いて、観光客には地域の印象

を高めることができる。また、秋田県民にはふるさとのイメージをお客さんにアピールすることができる。

駅では、観光客のために秋田弁と秋田の伝説の鬼である「なまはげ」を用いて、観光客にアピールしている。



図3__なまはげと秋田弁を用いた写真スポット

図3のように、観光客のために秋田方言を用いていることがわかる。その地域だけの方言を活用して観光客にアピールしている。

また、現在、秋田県では2015年4月から、新たな観光キャッチコピーとして「んだ、んだ、秋田」が発表された。



図4__秋田ロゴデザイン2015年版

秋田の認知度を高め、イメージアップを図るために、今後本県の様々なPR活動に活用し、県内外に広く展開してまいります。また、県民の皆様、企業・団体、市町村等、多くの方々にも積極的に活用していただきますようお願いします。

上記のように、秋田県庁サイト掲載では秋田方言を積極的に活用しながら、地域のイメージを高めようとしている。また、地域の人々にもロゴデザインをお勧めしながら、地域の発展を図っている。

また、日高（2011）によると、日本社会の秋田方言に対する意識の変化を背景にして、秋田では現在、地域の「内」に向けての方言活用が盛んに行われているようになっていると述べている。このように、秋田方言は外に向けて秋田のイメージを創出することもあるが、一方では秋田地域の人々のためにも秋田方言が向いていることもある。

方言は地域の固有の言葉であり、その地域の人々同士にとって連帯意識を生み出すこともできる。秋田では方言を外にだけ向けて用いるのではなく、「内」に向けて、つまり、秋田県民のために方言を活用して、仲間意識や連帯感を生み出そうとしている。その例の一つとして挙げられることは、秋田県のキャラクターである。いわば、「超神ネイガー」というヒーローキャラクターである。こどもの日とか、県内行事がある時、子供や県民のために「超神ネイガー」ショーが行われている。このキャラクターの特徴は秋田弁でセリフをしながら、悪を倒すという内容である。日高（2011）によると、秋田の伝統行事や方言をキャラクター化することにより、地域の人々に、「自分たちのためのキャラクターだ」という意識を抱かせる。また、結果的には世代を超えた「地域アイデンティティ」の形成を促すことにつながると述べている。

このような秋田の方言活用の例を振り返ってみると、現在の地域では、方言はただ地域の人々同士に使う言葉ではなく、外部には地域をアピールするものであり、内部では地域の人々に連帯感を持たせるものである。

3. 現代日本の方言の価値について

方言の価値は時代とともに変わってきた。近代に入ってから、方言についてよいイメージではなかった。政府から標準語がお勧めされ、各種メディアでは標準語を使っていた。もちろん、標準語があるからこそ、全国でのコミュニケーションが通じる。そして、世界的に日本語を学んでいる人にも良いことである。

しかし、標準語を政策を広げながら、その地域の方言がどんどん減っているように見られた。特に、現在は少数話者の方言は減んでゆく危険にさらされ、ここままでは歴史の中で記録だけ残されてしまう方言が続いて出るかもしれない。ソジエ内田（2008）によると、弱い言葉や文化を守り、多様性を尊重するためには、そのための組織的な働きかけが必要であると述べている。このように日本では少数話者の方言についてはまだまだだと思われる。少数話者の方言が減んでゆく問題を防ぐためには、政府の支援も必要だと考える。その地域の努力だけでは足りない点があると思われる。たとえば、方言復興のため財政的な支援やより詳しい復興政策が必要だと思われる。

幸いに、現在の日本では方言が再認識されている。前には、方言に対して「田舎」のイメージだったけど、最近は「日本人の心のふるさと」というイメージに変わっている。また、地域では、方言が地域的な特有性に注目し、方言活用の可能性に焦点を当てている。メディアでも方言を扱っているし、地域では方言に関する施策をどんどん広げている。日高（2011）によると、方言は日常生活言語の機能よりは「イメージ言語」としての機能を強めつつあると述べている。方言がその地域固有のイメージだとアピールしている。現在は方言がただ日常生活で使う言語の機能ではなく、その地域のイメージを高める機能も担っている。秋田の例のように、地域のアピール手段として方言を用いている。上記2-3のように、市場で方言を用いて地元の伝統的なイメージをアピールしたり、駅の写真スポットのように、秋田の名物であるなまはげと方言を活用して、その地域だけのアピールポイントで活用されている。また、地域のアイデンティティの形成のために、キャラクターなどを計画

して、地域の人々に連帯感を持たせている。それが、後では世代間のつながりになると思われる。

このような例からみると、方言に関する認識が変わったことがみられる。標準語が強要され、方言が弾圧された時期もあったが、今は方言が地域の個性としてアピール手段に変わったいる。

また、方言は日本語の一部として認められている。日高（2011）によると、現代社会に方言が存在する最大の理由は、日本語の多様性を、現代の日本人に気づかせるものであると述べている。このように時代が変わって、方言の価値が再び認識されて、日本語の中で弾圧されるものではなく、日本語の多様さとして認められている。

このように現代の方言の価値は「地域の資源」として認識されている。標準語時代の中で方言は、話し言葉機能だけではなく、地域をアピールできる資源として用いている。方言をその地域のアピールポイントとして扱って、その地域の観光、商売などの外部と、地域のアイデンティティ形成、連帯感を持たせるという内部の調和が、現在の方言である。

おわりに

本論文は日本の方言政策を振り返って、標準語時代と呼ばれる現代の方言の価値に注目した。日本の方言政策は、大体に近代時代から政策が広げられた。近代化のため、標準語を整備し、より効率的な言語を普及しようとした。標準語がメディアによって普及され、あらゆる生活の中に染み込まれた。それで、昔から地域で使われた方言に弾圧し、標準語が進められて、滅び行く方言もあった。

しかし、現代に入ってから、方言の衰退を防ぐために方言を保護しようとする動きがはじめた。地域ごとに方言を再活用する動きが見られた。特に秋田の場合、地域のアピールや地域アイデンティティ形成などの例のように、ただの生活言語ではなくて「地域の資源」としての役割をしていることがわかった。

この方言をちゃんと守って地域のアイデンティティを確保するためには、地域の文化に結びつくことも必要だと思われる。地域の民俗文化としての方言を保護しながら、この方言を次の世代に継承するためにも、地方では方言の価値を感じられるような施策が必要であり、政府は各地域の方言の守るためのより積極的な支援をする必要があると思われる。

参考文献

日高水簿 (2011) 『秋田県民は本当にええひりこぎか?』 無明舎出版

真田真治 (1999) 『展望 現代の方言』 白帝社

呉人恵 (編) (2011) 『日本の危機言語』 北海道大学出版会

ソジエ内田恵美 (2008) 『日本の言語政策における統一性と多様性』

http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/32785/1/KyoyoShogakuKenkyu_125_Sauzier-Uchida.pdfから取得